

ヒグマの飼育

北海道でヒグマを人が飼育したのは、遺跡などから推定すると、たとえば香深井遺跡のように、アイヌ期以前のオホーツク文化期までさかのぼれる可能性があるというから、千年以上も前からのことのようなのだ。それから現在に至るまで綿々と続いている。

北海道に現存する野生動物の中でも、ヒグマは、いろいろな面できり分け人との係わりが深い動物であろう。

ヒグマがなぜ昔から人に飼われて来たのか、そして現在もなお飼われつつあるのか、私はその根は深く自然に生まれて来た行為だと思ふ。それは、ヒグマの生態そのものと、人間側の猟法、それらを抱き込んでいる自然の営みから来ている。

春になると、山の雪は堅くなり歩き安く、木は葉を落しているから見通しが良い。ヒグマは冬、穴の中で冬ごもりをし、その間に子グマを産み育てる。雪融けが始まると、子グマを連れて冬ごもりの穴から出てくる。そこで人間は、クマがまだ穴から出ぬうちに歩き安い山を歩いて、捕り安い穴狩りの方法を見出して狩りをする。そこには、四kgほどに育った子グマが居るから生け捕りにされる。かわいい盛りの子グマは小さくて役に立ちそうもないし、第一殺す気になれない。放っておけばまだ母グマの乳しか飲めないから死んでしまう。見殺しにできないから家に連れ帰って育てることになる。こうして、ヒグマの子は人に飼われる。

山で生け捕られた子グマを何頭か育ててみたが、中には牧場で生まれた子グマより、おっとりとして抱かれたり、わきの下に鼻を突っ込んで乳をねだったり、ひざの上で眠ってしまうほどよく人になつく子グマもいる。

しかし、彼らは、一年間で百倍以上の五〇〜六〇kg以上に成長し、ちょうど大人の体重を越すようになる。自分の体重を越えてしまうと、力で子グマをコントロールすることが難しくなる。子グマ自身も自信がついて来て、だれでも手に負えるという範囲を越える。

そこで、アイヌがイオマンテをして、ヒグマが神の国へ帰れるようにするという風習は、飼育してみると、とても自然で理にかなっていると感じられる。その精神は野蠻どころか、現代のわれわれより数段も高尚で深く上だと思ふ。

北海道というこの地は、人々が狩猟、採集生活をしてきた時間の方が、その後の農耕牧畜、工業化の時代より圧倒的に長い。その頃は、野生から日々の生きる糧を得るのだから認識も対応のし方も、今の比ではなか



ツメをたて前肢をふりあげて攻撃する子ぐま
(産室から出たばかり)

ったはずだ。ヒグマがキムンカムイ・山の神として人が付き合った時代だ。

北海道に本州から開拓が入り、農耕、牧畜が始められたのはつい最近のことで、それからの変化は余りに目ざましいので、ヒグマも目を覚ますにはいられず丸くしているかもしれない。残念なことに、本州ではヒグマは、早々と絶滅してしまっていたので彼達は、何もわからない。ならば、付き合ひの長いその土地のアイヌに学べばよかったのに、それをしなかったため、人間にとっても、ヒグマにとっても悲劇となっている。全く対応のし方を知らない本州の人々にとっては、雑食性であるヒグマは苦勞して作った農作物や家畜どころか自分達の命をもねらう殺人鬼、悪党の何者でもなく、抹殺、駆逐し尽さずば文明開化はありえぬとばかり、本当のヒグマというものを知らずとはせず、知らぬまま駆除されるべき物としてしか考えられず、考えず扱われて来た。そのため、最も効果的な春グマ猟、つまり、親も子も根こそぎ捕り尽くそうと今だに奨励されている。

当然子グマが生け捕られることも多い。どんな殺人鬼のヒグマでも子グマはかわいい。殺すにしのびず、本州の人々でもだれかかれかの手で、子グマは飼われ続けられて来た。しかし、アイヌのようにイオマンテの風習を持たない人々は、大きくなり過ぎて困ってしまう。

人々の生活に余暇が生まれ、観光が盛んになる。北海道といえば、ヒグマ。めったに見られぬ世界最大の猛獣。人々は集まる。まずみやげ物屋の店先に子グマがつけられた。しかし大きくなると困る。大きくなっても困らない大きな施設、つまりクマ牧場が出現する。子グマ達は、やがて成獣となり、子を産む。繁殖に関しても、人が管理することができるようになると、いよいよ牧場的要素を加えることができる。

しかし現在の人々は、まだヒグマを、プタやウシのように家畜にしたとは思わないようである。このあたりが、今なのだと思われる。すでに絶滅してしまった西ヨーロッパの多くの国とは異なり、野生の

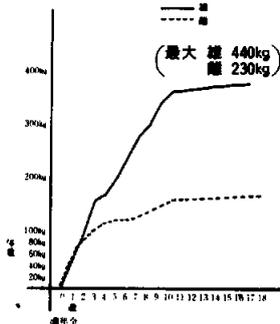
ヒグマがわれわれと共に生きている。世界的に見れば、ヒグマはすでに減少し、保護の時代に入っているのに、北海道は今だに駆除の時代だ。他の国では保護のため春グマ猟は禁止されているから、子グマの生け捕りもなく、だから動物園など限られた所でしか飼育されていない。本当のところ、ヒグマの生息数すらつかめていないのに、春グマ猟を奨励し、子グマが生け捕りにされ飼われているということは、世界的にみるときわめて北道的だ。そして、飛び越えて、繁殖技術を持ちヒグマが生産されるクマ牧場がある。

のほりべつクマ牧場は、登別温泉町にある四方嶺山頂直下（海拔五三〇m）にあり、北海道産のヒグマ（*Ursus arctos yezoensis*）のみ多頭集団飼育している。

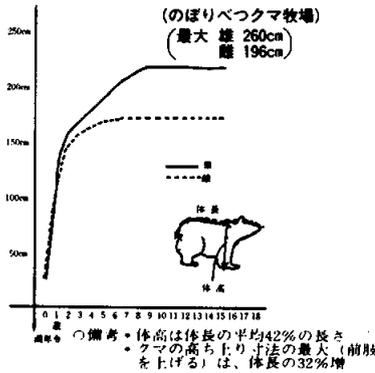
昭和三十三年八頭の子グマを集め開設、昭和三十七年から出産が見られ、多くの試行錯誤、失敗を重ねて四十一年初めて一頭の子グマを育てることに成功、繁殖技術も確立して年ごとに増え現在一八八頭を数えている。開設当時はできる限り自然に近い状態で見てもらえるよう、自然林をそのまま高さ四m半の鉄筋コンクリート堀で囲い、シラカンバ、ミズナラ、ヤチグモ、ミヤマハンノキなどが茂り、チシマザサやオオハナウド、オニシモツケなど様々な下草に覆れていたが二年で下草がなくなり、木も枯れて来た。下草がなくなると、泥が流れて牧場内の清掃ができなくなった、やむなく床面もすべてコンクリートになり、現在に至っている。ヒグマは木に登り、葉をちぎり、立派なツメで、子グマでも二―三時間三m以上の穴を掘るので、どこの動物園でもヒグマ舎は、緑を残すことに成功していないようだ。

現在牧場では、成獣（満三歳―二二歳）雌雄約半数ずつ九〇頭が一三七〇㎡に、二歳と三歳の雌雄がそれぞれ別々に七六〇㎡に約六〇頭、当歳子グマがいる幼稚園牧場が一七〇㎡に約三〇頭、一ベアの親子がいる親子牧場が五二㎡あり、夜間はそれぞれの放養場に隣接するコンクリート造りの獣舎に収容され食事をし、寝て、朝に放養場に出される。

各年平均体重
(のぼりべつクマ牧場)



各年平均体長
(鼻の先から尾の付根まで)



成獣以下のクマは、各年令ごとに分けなければ大きさに差があるため、一緒にすると大きなクマに殺される。この現象は、サケを捕るためヒグマが六〇〜八〇頭も集まることで有名なアラスカのマックニール川でも認められているので、過密飼育下にみられる特殊状況からのみ起こるものではないようだ。

冬期間、牧場のヒグマ達は冬ごもりをしない。食欲は落ちるが餌を食べているとしなくてもいいようだ。ただ出産と子育てのため、二m四方の暗い個室の産室がある。前例の全くないクマの集団飼育は予測がつかず、試行錯誤の結果現在の姿となった。単独生活をするといわれるヒグマが、かなりの過密で集団生活し得ることが分った。

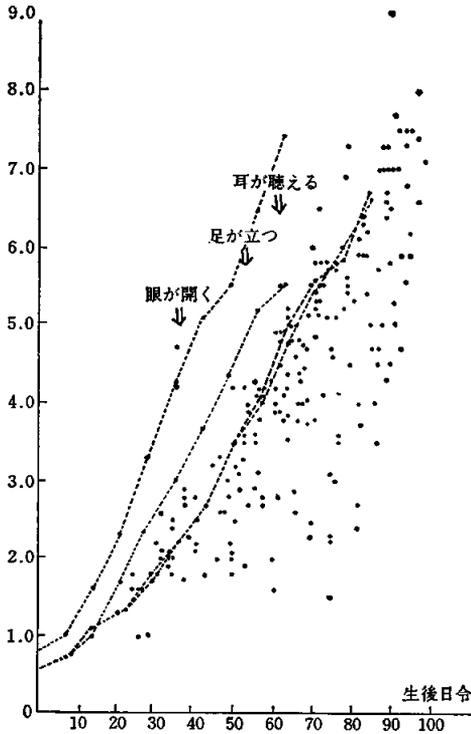
ヒグマの出産は、二m以上もある雪の下の穴の中で、しかも最も厳しい大寒の一月下旬であるから、そこでの出来事はなかなか知ることはできなかった。たまたま子グマが穴の中で、見つかったも余りに小さいので、早産の子ではないかと思われたりしたという。確かにあの巨体で四カ月間の絶食生活に加え、

出産、授乳、育児をするというのは、われわれから見れば神業だ。飼育という行為によって、それらを知ることが可能になった。特に出産や子育ては、ヒグマの方がよほど人に慣れ、心を許し、われわれを受け入れてくれなければ、勝手なことをすると、母グマは産んだ子を食べてしまう。われわれが産室に入り(残念ながらまだ鉄格子はあるが)すぐ隣りで共に寝泊りしても、クマが許してくれるのに一〇年以上かかっている。発見された知見一つ一つの裏には毎日、一日も欠かすことのできない飼育係員の努力とヒグマの関係がある。

繁殖に関してクマ牧場で得た知見のいくつかを一例として上げてみよう。二五年間の記録によるものだ。

①交尾は五月上旬より七月上旬にみられ、一頭の発情期間は約一五日〜五〇日間とばらつきがある。決まったペアはなく、一日七〜八頭と入れ替わり交尾する。②出産日は最も早いので一月七日で、最も遅くて三月十日。出産日の出現頻度の中央値は一月二七日で、昔から言われていた大寒に産むという伝えと一致する。③妊娠期間は二一〇〜二二〇日。④初産年齢は満三歳。二歳五カ月で妊娠するが、四歳の方が多い。⑤出産年齢で最も多いのは八歳、一二歳を過ぎると急激に減少し、最高齢は現在のところ二〇歳で母乳で哺育に成功している。⑥春に子を分離してしまふと毎年出産可能である。⑦一個体の出産回数と総頭数の最高は、一四回二九頭である。⑧出産頭数は、一頭四〇%、二頭五九%、三頭三%で三頭出産は同一個体が多い。⑨性は雄五四%、雌四六%。次に実際のお産と子育て、子グマはどのようなものかを紹介しよう。昔から、お産が軽いので、子宮の一部を安産のお守りにしたと言ひ、実際今も頼まれる。妊娠しても外見上お腹が大きくならず、活動も変化しないので判別できないが、出産三〜四日前になると、産室内にワラで巣状に作る寝床がきれいになり、ほとんど動きがなくなるので近いことが分る。お産は、四肢で立って行い、腰をかがめて、やはり苦しうにいきむ。中腰にかがみ込んで出てくるものはすべて片端から、うどんでもすすするように食

生後日令—体重の関係
 (126頭、225回測定)
 (破線：米国の動物園)



生まれたばかりの子グマは、体重四〇〇〜五〇〇g、体長二五cm。ネズミのように体毛は短く、目は閉じ、耳は桜貝のようだ。皮が被り毛もなく、穴もない。ツメは長く鋭く彎曲して、母グマの胸によじ登って乳首に吸い付くことができる。ツメと吸う力は自分の体をささえるに充分強い。生後一カ月くらいまでは首がすわらず、立ち上ることもできないので、腹とあごを付け這う。授乳は二〜三時間おきに一回五〜六分間飲み、その後グググという怪奇音を出して乳をしゃぶり甘える。乳は胸に二対鼠蹊部に一對ある。授乳の前には、人の赤ちゃんと同じようにギャーギャーと大きな声でなき、飲み終るとひたすら眠るといふ同

べてしまう。子グマが出てくるとなめてきれいにし、後産もすべて血痕一つ残さず、なめとる。ヒトと比べまことにむだのない、静かで美しいお産だ。産み終えると、そのまま子グマを腹と胸の間にしっかり抱きかかえたまま横になる。一週間はそのまま身動もしない。動くと言えば、子グマの尻をなめ排便排尿させる時くらいのもので、授乳の時でさえ眠っている。子グマの方が自ら乳房に吸いついて飲む。母グマのイヒキの音と子グマの乳を飲む音が重なっているので分かる。

ジパタンで生きている。開眼時期は三五〜四〇日薄い膜がかかり月の光のような青い色をしているが、五〇日目を過ぎると膜もとれ、瞳が輝き出し見えるようになる。耳は二〇日目を過ぎると内側にしわが落ち込んで来て穴が開き出し、耳介は毛に被れて来て四五日頃から音に反応して動く。歯は二〇日頃から犬歯や門歯からはえ出す。

行動は、二〇日頃から首がすわり、三〇日目で前肢を振り上げ、四〇日目で二〜三步の歩行可能、六〇日目より立っていること可能。七〇日目で前肢を振り上げてたたく攻撃がみられる。こうして一〇〇日間産室の中で母グマに育てられ、すっかり足腰がしっかりすると外界に出る。毎年四月二十七日、産室から幼稚園牧場に出され、母に替って飼育係による集団哺育がされる。一歳、二歳は同年齢の集団のみで過し、成獣となる。三歳ですべての成獣と混成される。野生であれば、二年間母グマとのみ過す。牧場のヒグマ達は、このような飼育環境を反映し、それぞ

れの社会関係がみられる。幼稚園や学校と、集団保育に移行して来た人社会とオーバーラップしておもしろい。

子グマの離乳は五月下旬〜六月上旬、乳歯もはえ、山は若葉、実にうまくできている。牧場では、人間の赤ちゃんと同じ、人用粉ミルクからおかゆ、卵や白身の魚、やわらかいトマトなど野菜と移行させる。雑食性であるわれわれと、もともと共通しているのに加えて、人の食べ物が好きだから山ではよほど残飯など残さぬよう注意しなければならぬ。特に人工哺育をしてみると、離乳期である、五月、六月に食べたものの嗜好が強く固定されるから恐ろしい。

ヒグマの成長は目覚しいが、体重推移は面白い。四〇〇〜五〇〇gで生まれた子グマが一〇〇日令で冬ごもりから外へ出る頃がちよと一〇倍の四〜五kg、一年で一〇〇倍の四〇〜五〇kg、成獣となると最大級で一〇〇〇倍の四〇〇kgが雄、雌はその半分の二〇〇kgとところがよい。

一日と大きくなる子グマを見ていると、一体どんな乳を飲んでいるのか知りたくなる。麻酔をして乳をしぼり酪農学園大学乳製品研究室で

調べたところ、人と比べ脂肪三倍、タンパク質八倍、乳糖七倍、灰分七倍、特にリン一五倍、カルシウム一〇倍という結果を得た。

成獣ではしかし体の割には食べない。一日一回、野菜、ごはん、魚、肉類を煮込んだ物を平均すると水分込みで五、六kg、どんぶりに三杯、われわれと比べるとつつましいが、あのパワーはいったいどこからくるのか不思議だ。

牧場でそれぞれの年代のクマ達の生活や社会関係、成長過程をみると、余りにわれわれと似て身に詰まされたり、全く異なったり学ぶことばかりだ。たとえば、雌乳期の親子はいつまでも乳をねだり甘えてまわりつく子グマを、母グマが前肢で突き飛ばし、無視したりする。一方たつぷり乳をやり充分甘やかし、レスリングをしたりして遊んでやったり、厳しさとやさしさをわきまえた子育てに学んだりする。一歳では雌雄の差がなく体の大きい者が強く、われわれの小学校時代を思い浮かべると、二歳になると雄の方が大きくなり、活動的になって、もっぱらレスリングなどする。中学校時代に似ている。成獣になると性差がはっきりし、雄はニオイをつけたりお互いに威嚇したり順位性を持つ社会関係の行動に大変だ。比べて雌は無頓着で、突然倍の大きさの雄に飛びかかり咳みつくなど、予測不可能な行動をとりやすい。社会認識が雄よりない。イエローストーンの報告では、雄の行動圏が雌の三倍以上あることなどを読むと、密かに牧場での観察で、野生のヒグマ達の生活を想像してみたりするが、やっぱりと、一人合点したりする。これは慎まねばならぬことだが。

社会関係を知るには、まず一頭ずつ個体を見分けなければ始まらない。継続した観察が必要となる。クマとコミュニケーションし、お互いに感情の交流までできるのは、毎日触れ合うこと、つまり飼育することが手取り早い、人間の影響が加わってしまう。野生でも不可能ではないという夢は捨てたくない。

人は論理性を身に付けた片側で、クマほど素早く、鋭敏に、一瞬にしてその場の状況を判断し、気持、感情を汲み取り対応することを失った。人が気付く前に反応してしまうのだから、山ではほとんどの場合、ヒグマの方が身を対処し終っている。物の本では、クマは最も表情がなく、

いつ攻撃するかわからぬから危険だと書いてあるが、表情は豊かである。これは、われわれがヒグマと対面し学ぶことが余りに少な過ぎるからでヒグマの方は論文を書かず読まずとも瞬時に対応し身を処しているが、人はクマに殺されたりする。しかし、われわれは知識を集積し広め、予測可能にすることができると。相手を知らずして対処の方法がわかるはずはなく、当然、友好関係も持てるはずはない。初めからこちらが敵対し殺そうとしていれば、ヒグマの方も追い詰められれば殺すだろう。もつと悲劇は、人が友好的に思っても対応のし方を知らぬため殺されてしまうことだ。対応を誤まらず、環境をちゃんとすれば、共存できるはずだ。かわいがって育てた子グマ達は、野生から来た子グマも私を受け入れ、まだ裏切っていない。

クマ牧場の役割はいろいろある。飼育下ではあるが、クマそのものと余裕をもってじっくり対面できる。ヒグマは殺人鬼という妄想ではなく、何が、どこが、どうすれば恐ろしいか具体的に知識を得ることができる。

飼育下でなければできない実験や研究、野生での研究の子備実験、研究材料の採取、年齢や性別など明らかな個体の測定と基礎データの集積、観察の場など、行動圏が広く、ササに被われた北海道での野生ヒグマの研究は制約も大きいから、多くの人々の多面的な協力が必要だと思われる。

これまでクマ牧場では、北大ヒグマ研究グループや開拓記念館、北大、酪農学園大学等いろいろな施設や大学の研究者によって、共同や独自で研究されて来た。各種計測、繁殖、乳汁組成、血液、脳組成、冬ごもり、テレメーターの子備実験、染色体、歯牙成長過程、消化率、ホルモン、社会関係、行動、麻酔、食性、寄生虫、形態、被害防除のための忌避実験など多方面にわたる。ヒグマを絶滅に追いやるのではなく、共存をはかるためにも今後さらに重ねて行く必要がある。しかしこれらは、一企業や個人や団体のみが行って済むことではないはずだ。

(のびりべつクマ牧場学芸員)